



「被災地の片隅で」

宮城県仙台市 佐藤 眞司

金賞

津波から四日経ち、水が引いたあとの泥が乾燥して砂となり、風に舞い上がっていた。

あてもなくアパートの階段を降りると、一階のビリヤード店の、三十歳くらいの若い店長が、店の前に置いたテーブルの上にポットと紙コップを置いて立っていた。

『お湯あります』
あまり上手でない字で大きく書かれた紙がテーブルに貼ってあった。

店長によると一階は水浸しとのことだった。それはそうだ。ここだって一メートルも冠水したのだ。

「でも誰かのために、何かしたいですよ！」
彼は笑顔で言った。たまたまプロパンガスに被害が無かった我がアパートは、すべてが途絶した他の家と違ってガスは使うことができた。それで、給水の水をお湯にすることを思い立ったのだそうだ。私もあることを思いついてアパートの階段を駆け上がった。そして、長い間忘

れられていた贈答用のインスタントコーヒーを、傾いた食器棚の中から探し出して駆け下りた。

「コーヒーにしよう」
やがて、単色の世界にコーヒーの香りが漂い始めた。思えばこの四日間食料が手に入らず、毎日数個の乾パンと一個の缶詰めを、一家三人で分け合っていたのだ。空腹にコーヒーの香りが染みだした。

「まずは」
「いただきますしょう」

あの味を私は生涯忘れないだろう。胃に広がる暖かさ。鼻腔の奥の奥にまで広がるコーヒーの香り。舌にからみつき、いつまでも離れない香ばしい豆の味。食と暖房の無い摂氏三度の世界に、これは効いた。

「うまいね」
「うまい」
手書きの表示はすぐに『コーヒーあります』に変わった。

